

# 本を写すことと切ること —古今和歌集を例として—

関西大学 文学部 教授 田 中 登

近代以前、すなわち江戸時代までに行なわれていた本を、和本というが、この和本には、人が手で書き写した写本と、印刷した版（板）本とがある。伊勢物語や、源氏物語、あるいは古今和歌集などの文学作品が印刷され、本屋で売られるようになったのは、それ以前と比較して、格段に読者人口が拡大した江戸時代になってからのことである。それ以前一奈良・平安・鎌倉・室町時代一、文学作品は、もっぱら写本という形で行なわれてきたのである。

だが、このことは、江戸時代より前、この日本において、印刷技術が知られていなかったというわけでは、必ずしもない。あの有名な百万塔陀羅尼に見られるように、経典類に関しては、早く奈良時代から印刷されてきたのである。

写本と比較した時の、版本の大きな特徴は、同じ内容のものが、一時に、数十部、あるいは数百部と、数多く世間に出回ることであるが、要するに、これは同時に多くの人が同じ内容の書物を必要としていれば、書物は印刷に付されることもあるということを意味しよう。一方、それに対して、文学作品はどうか。伊勢でも、源氏でも、古今でも、それらは読みたいと思った人が読めばいいわけで、こうした状況下にあっても、書物は印刷されることはなく、関心のある人がその本を所有している人から借りてきて写せば、それでこと足りたのである。

\* \* \*

ところで、書というものがいつの時代でも文化の中核を占めてきた、この日本においては、平安・鎌倉時代という貴族文化が栄えた

時代を通じて、幾多の優れた写本が作られ、大事につたえられてきたが、室町時代の後半から以後、古人の筆跡を尊ぶ風潮が、茶道の隆盛などと相俟って、盛んになるにつれて、それらの典籍は、一枚一枚の紙片に分割されるようになった。なぜなら、写本というのは、版本と違い、同じものはこの世に二つとないからであり、また筆跡の鑑賞というものが目的であれば、必ずしも一冊丸ごと所持しなくても、たった一頁分でもこと足りるからである。かくして、一冊ないしは一巻の書物から切り取られた断簡のことを、古筆切（こひつぎれ）という。

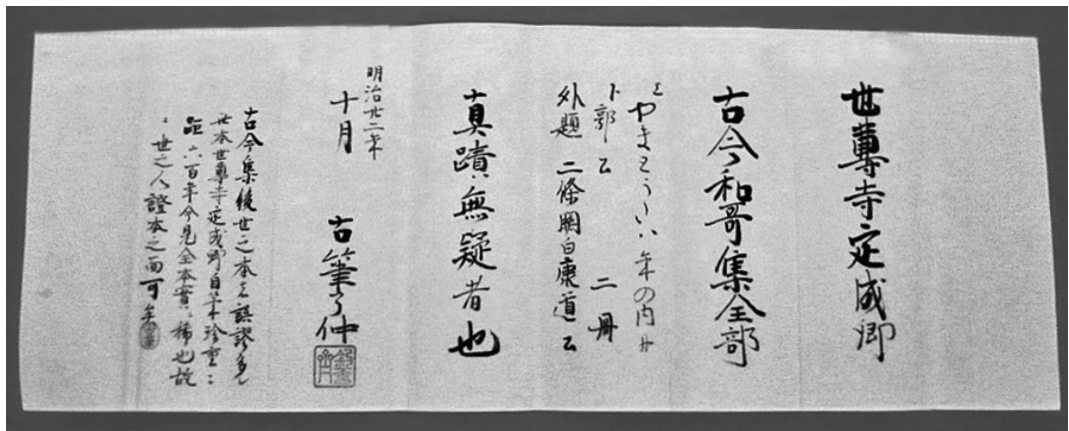
\* \* \*

世の収集家というものは、ただ時代が古くて良いものだ、というだけでは、大枚はたいて買ったりはしない。古筆切についても同じことで、今、自分が手にしている切が、いったい、どこのだれによって書かれたものか、知りたいと思うのは、当然のことである。そこで、あまた伝わる古筆切の一々について、それがだれによって書かれたかを鑑定する鑑定士が、江戸時代になると登場した。世にこれを古筆見（こひつみ）という。

通常、古筆切は、古筆見によって鑑定された筆者の名を記した、短冊型の小紙片を伴って売買されることが多いが、この小紙片のことを、極札（きわめふだ）という。今日、「極め付きのファイン・プレイ」とか「極め付きの演技」などという、「極め付き」というのは、これに由来する。また、そんなちっぽけの紙片では頼りない、という向きには、全紙（切っても、折っても一枚の和紙）を横に二つ

折にし、そこに大きな文字で麗々しく、「右〇〇は、だれその筆跡に間違いなし」などと、鑑定結果を書いたりもした。これを折紙（お

りがみ）というが、これまた現在「折紙付きの〇〇」などといったりする場合の、折紙の語源となっているものである。



\* \* \*

さて、それでは、江戸時代の人々は、たくさん集めた古筆切を、いったいどのように保存し、鑑賞していたのか。これには、①掛軸といって、茶席の床の間にかけての鑑賞、②貼交屏風（はりまぜびょうぶ）といって、色紙や短冊などと共に、バランスよく屏風に貼り合わせての鑑賞、③手鑑帖（てかがみじょう）といって、現在のアルバム写真のように、帖に古筆切を貼り、頁を繰りながらの鑑賞などが考えられよう。①と③は、現在でも普通に行なわれていることだが、②は家屋の事情から、少しずつ姿を消しつつあるのは、まことに残念なことである。

\* \* \*

本稿は、この度、近畿大学中央図書館の所蔵に帰した古今和歌集のことを紹介するのが、主たる目的なので、ここで話を、古今集の古写本や古筆切について、転じてみたい。

延喜5年（905）醍醐天皇の命の下、紀貫之ら4人の歌人によって編まれた古今和歌集20巻は、以降、歌の道を志す人々によって、聖典として崇められ、平安・鎌倉時代には、幾多の写本が制作されたのである。

いったい、どれぐらいの写本が作られたのか、今日からでは想像もつきかねるが、古今集の場合、平安書写のものが、現存するものだけでも、およそ30種はあるといわれている。伝紀貫之筆高野切・伝藤原行成筆関戸本切・伝小野道風筆本阿弥切・伝源俊頼筆卷子本切・伝紀貫之筆亀山切等々……。これらは書写年代も11世紀の中葉から12世紀の初頭と古く、その上、書道芸術的にも優れ、かつ美しい装飾料紙に認められているものばかりで、国文学のテキストとしてはもちろんのこと、いわゆるお宝品としても、すこぶる評価の高いものばかりである。

上記の作品は、いずれも〇〇切と呼ばれて、零本（れいほん。一部だけが伝わるもの）や断簡といった形で伝わるものであるが、中には、古今集20巻を完全に具備したものもないわけではない。それは伝源俊頼筆元永本と伝藤原公任筆本のわずかに2本だけである。すなわち現存する平安書写の古今集の内、完本として伝存するのは、1割にも満たないのであるが、これを要するに、時代が古くて優れた典籍は、江戸時代の古筆ブームの中で、片っ端から切り崩され、古筆切という形で鑑賞されていた、ということになる。

\* \* \*

鎌倉時代書写の古今集となると、平安のそれとは比ではなく、枚挙にいとまもないほど伝存するが、それでも、20巻を完全に具備するものとなると、たいそう貴重なものといってよい。

鎌倉の古今集といえば、ただちに想起されるのが、藤原定家が書写・校訂した、いわゆる定家本（ていかぼん）である。平安の古典に深く関心を寄せていた定家は、生涯17度も古今集を書写したといわれているが、後世最も流布したのは、貞応2年（1223）7月に書写した「貞応本」である。おそらく世に伝わる定家本の9割方は、この貞応本といってよからう。

この度、近畿大学中央図書館の所蔵に帰した古今集の写本は、同じ定家本であっても、貞応本と比較すれば、きわめて珍しい、嘉禄2年（1226）4月に写された本の系統に属するもの。しかも、20巻を具備しているのは、貴重なことである。

\* \* \*

定家の嘉禄本といえば、その自筆本が今も京都の冷泉家に伝存しており、これは国宝にも指定されて有名なものだが、それに次いで世に知られているのが、定家の孫・冷泉為相が嘉元3年（1305）に書写したといわれる陽明文庫本（近衛家の文庫）である。

近畿大学本は古筆見の極めに、能書家の世尊寺定成の筆とあり、それが果たして真筆かどうかは、今後時間をかけて検討する必要があるが、その書写年代が鎌倉の後期を下るものではないことは間違いのないところである。してみれば、近畿大学本は、定家の嘉禄2年本としては、陽明文庫本と相拮抗するほど、書写の古いものということになろう。

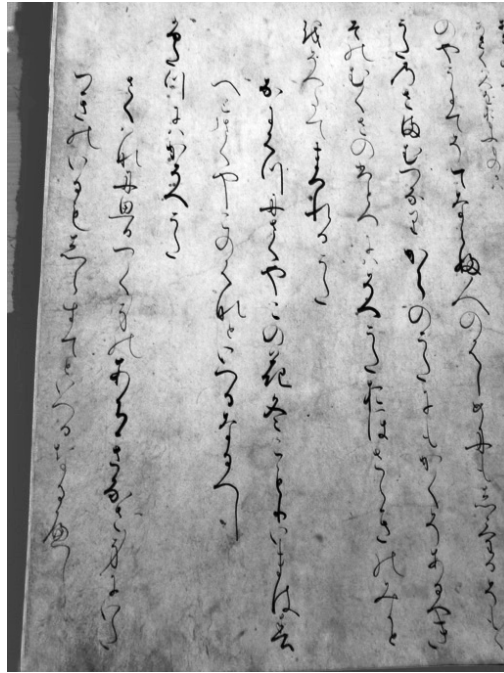
御講演の内容をおまとめいただきましたものです。当日は、近畿大学所蔵の嘉禄本系『古今和歌集』を前にしてお話くださり、現在に残された「古典文学の現場」に立ち会う喜びを満喫させていただきました。

近畿大学は、一昨年、この嘉禄本系『古今和歌集』を、そして昨年は貞応本系『古今和歌集』を所蔵することができました。これはひとえに田中登先生のお力添えによるものです。記して深甚の感謝の念を表させていただきます。

（村瀬憲夫記）

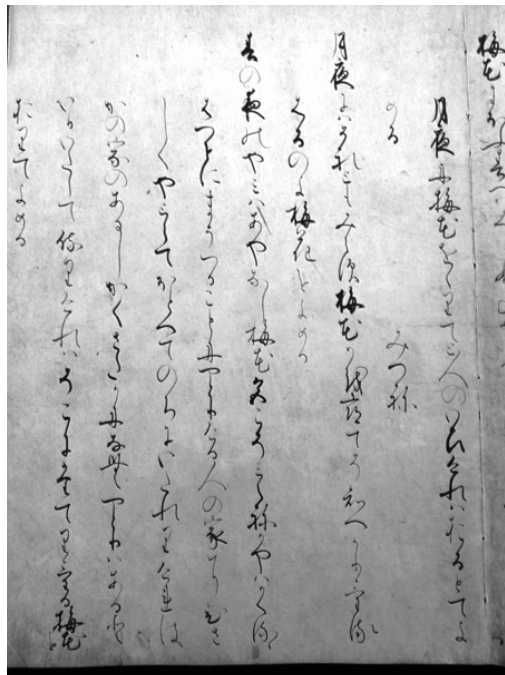
※この御文は、昨平成23年11月24日に開催されました「文芸学部日本文学専攻公開講演会」での

以下は館蔵、嘉禄本系『古今和歌集』の影印です。



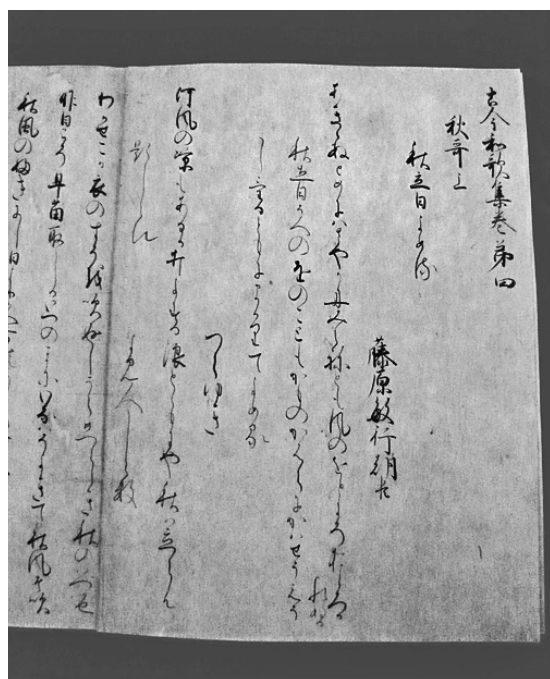
「仮名序」

「なにはつに さくや この花」の歌（19 頁参照）が記されている。

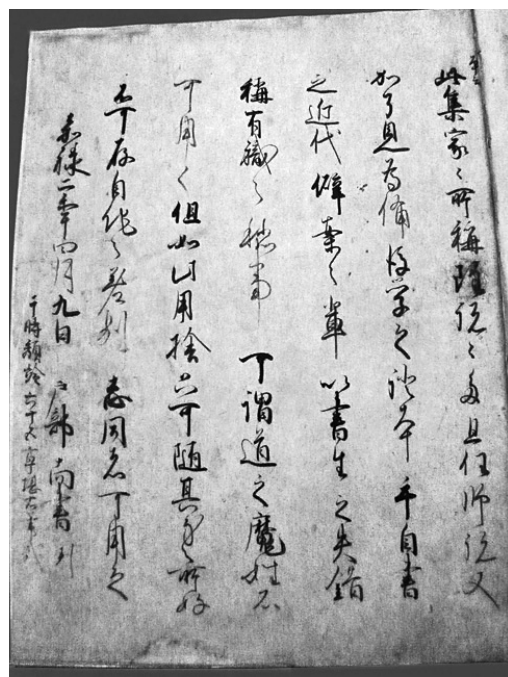
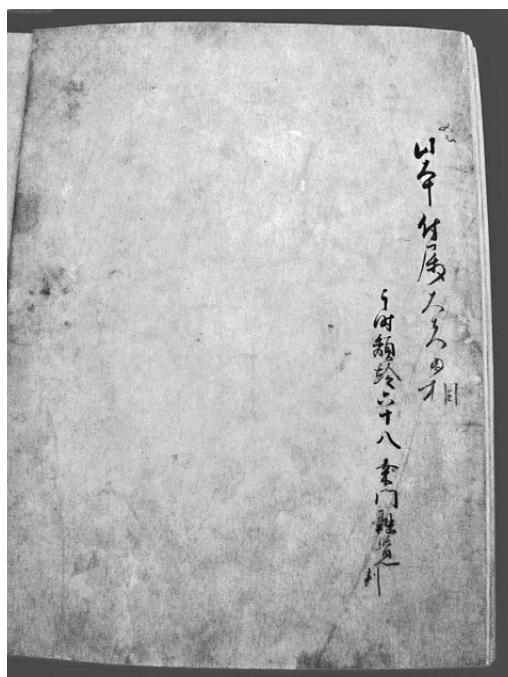


「巻第一 春上」

「はるのよ 梅花をよめる 春の夜のやみは あやなし 梅花 色こそ みえね かやは かくるる」



「巻第四 秋歌 上」 冒頭部



奥書